

テキスト：産業クラスター論

来週テスト：ノートテキスト持ち込み可

参考ページ 15・16・17・235・236・146・147・158・159

全 20 問

他にマクロモデル 1 問。

今日の授業

1 ベトナム

2 フローチャートアプローチ

3 マクロモデル

1 ドイモイ（刷新）政策（213 頁）

1986 年 1 ドル 15 ドソ→1 ドル 9000 ドソ

ペレストロイカ（ソ連）計画経済が市場経済へ・・・

改革開放（中国）

東欧→ラオス・カンボジア

アジアだとミャンマー、北朝鮮

アメリカだとキューバ

どれも基本的には市場経済化を推進するもの。もう少し具体的にいうと、これが構造調整プログラム。

1 為替レート

2 金利

3 統制価格（米・石油）

これを全部自由化するというもの。これで市場経済化がなされる。そうして競争がなされる。ベトナムのドイモイという政策もそう。

構造調整プログラムというのは世界銀行が中心となって自由化をしたらお金を貸しますという、コンディショナリティ条件でやったもの。ほとんどの国がお金を借りざるを得ない状況だったので、みんな従ってやった。こうして競争になったことによって今の石油の値上がりの条件がそろい値上がりしている。

この後、ベトナムは成長の三角地帯という政策を採った。ハノイ・ダナン・ホーチミンの地域をベースに発展するという政策を採った。この政策はどちらかというと産業政策的な考え方である。産業政策的な考え方でホーチミンはある程度発展した。しかしハノイは成功しなかった。ハノイーハイフォン間に国道五号線を日本が作った？。国際協力銀行（後の新 JICA）とリハビリテーションという謎の板書。

この際に産業クラスター政策がとられた。その際のアプローチを先生はフローチャートアプローチと呼んだ。

説明すると台湾の高雄に輸出加工区（EPZ）を作った。これを J リーグと同じだといった。1993年にできたサッカーリーグ。この時に外国選手を呼び込んだが、その条件を、つまり賃金などを整えた。この当時はバブルで余裕があったので、賃金を高く設定して外国選手を呼び寄せた。こうしてサービス産業を建てていった。この際に問題となるのは日本（地元）の選手が育つかどうかということである。結果的には育った。

この事実が輸出加工区とどう関係あるのかということ。この外国選手が日本企業である。日本選手はすそ野産業、つまり部品産業である。条件は様々。

こういうやり方がアジア中で実施された。そのため1986年から97年、アジア通貨危機まで順調に発展した。

アジア通貨危機において直面した問題というのは、すそ野産業がまだ十分に育っていなかったということ。それで危機に直面した。

この輸出加工区は世界中にできた。ブラジルのマナウスにできたが全く上手くいかなかった。なぜか。

それは条件が問題だったのである。

フローチャートアプローチ

住友商事①EPZ 工業団地

↓

タンロン工業団地②キャパシティー・ビルディング

↓関連企業が入ってくる→部品産業（100社くらい）

③アンカー企業

トヨタが広州に来る。あるいはキャノンがハノイに来る。するとキャノンがインクジェットプリンタを生産するときに800部品必要。トヨタは二万以上必要。するとキャノンが来ると周りに部品製造業の会社が来る。トヨタもまた然り。

トヨタが一次系列会社（部品製造）に発注すると2・3・4・5次にどんどん発注することになる。これがケイレツというもの。これが段々崩れてきている。一次系列のデンソーはインド財閥に・・・？

例えば広州では、日産という会社が花都というところであって、ホンダが市内であって、南沙にトヨタがあり、環状線で繋がっていると、部品が一つのところで生産され一斉に出荷されるということで、系列が崩れつつあるのである。すると日産では組み立てを行うだけである。

部品というのは金型であり、これこそが日本ブランドである。

それで、こういう企業の動きの中で、クラスターというものができていく。ということで、

③アンカー企業 キヤノン

↓

クラスターということになる。

ということでハノイハイフォンを結ぶ五号線のところでは産業クラスターができています。産業クラスターというのはブドウの房という意味。このように日産ホンダトヨタがあつまるとその周りに部品製造が集まって、そこでは賃金が高くなり、成り立たなくなる。そうしてこういった企業はベトナムに移動していった。

そして段々この広州とハノイがリンクしていった。それとバンコクが繋がっていった。東西経済回廊ということになる。この一帯が成長の中心になっている。日本は広州や各地に基点を持っている。2010年には上海、天津とも繋がる感じだ。

別にインドにもあって、そこにニューデリー・ムンバン・バンガロール・チェンナイがあって、回廊ができています。つまり環状的に繋がっている。その間、インドと東西経済回廊の間で邪魔しているのがミャンマーである。なので迂回路を採って、チェンナイとシンガポール、ニューデリーと中国で繋がろうとしている。

まだキャパシティについて説明していない。一つにはインフラと呼ばれるものがある。道路とか港とか通信設備とか。ハードインフラと呼ばれるもの。これは日本のODAが中心となって行っている。日本のODAはこれが特徴的らしい。

二つ目のキャパシティというのは、制度である。制度を作る。特に外資を呼ぶ場合の制度というのは規制緩和。外国の企業が活動しやすいようにするというのが目的。Jパワーという会社が問題となっているが、日本政府は規制することによって外国の資本が買わないようにしている。電電開発という国に近い会社を買収されようとしているのを、政府が阻止しようとしている。成田空港のターミナルを外資が買おうとしている。どこまで外資を許すのかということ。これに関しては規制緩和が大きなポイントとなる。またワンストップサービスというのがあって、一回で全部処理ができるようにするという感じ。これは例えば北九州に港があって工場を建てる。半分が運輸省の管轄で、もう半分は建設省の管轄だった。そうすると北九州に工場を建てたのに、運輸省と建設省に申請しなければならない。すると認可が下りるのに半年かかる。その間に大連にもっと良い場所があるよということ

で、この申請が下ろされたという事例がある。これを防ぐために行われるのがワンステップサービスというものである。

もう一つは人材が要るかどうか。基本的に日本企業がアジアに出て行ったのは低賃金を求めていたからである。これが1985年のプラザ合意である。円高になったために日本では、低賃金が成立しなくなった。一時期1000円のバイト料だったのは1ドル200円の時。それが1ドル100円になってしまったので低賃金が成立しなくなった。なので低賃金を求めてアジア進出を試みるようになったのである。

タイ→マレーシア→中国→ベトナム→インドのような感じ。

そして今はただの低賃金ではなく、ある程度の技術を持った人を雇うということが行われつつある。Skilled labor というもの。

富士通もソニーもみんなやっている。中国や韓国は大卒の人がいっぱい余っている。低賃金は働くところはあるのだが、中賃金からは余りつつあるので、そういうところとのかね合いも求められつつある。こうしてアジアは一つになりつつあるのである。

アジアの中でどうやって共生してゆくかが問われている。

もう一つは生活環境である。一番重要なのは病院。それと学校。もちろん家がないと困る。カラオケも大事になりつつある。ゴルフ場やショッピングセンター。こういうものを整えていないと外国企業の誘致は難しいということになる。

こういう形でアジアでは成功を収めているところもある。

みんなアジアで頑張って日本企業に貢献してほしい。結論。

マクロモデルについて。試験デル。

$$Y = C + I + G + X - M$$

$$S = Y - T - C = (Y - T) - C$$

$$S - I + T - G = X - M$$

2 成長の三角地帯

3 社会

4 社会主義指向政策